

日本精工株式会社 2022 年度 サステナビリティ説明会 質疑応答要旨

◆「つくる」の取り組みについて(自社の CO₂ 排出量削減)

【Q1】

CO₂ 排出量削減目標を FY26 に▲50%、FY35 に▲100%としているが、再エネ・省エネ・技術革新で、それぞれの寄与度を教えてほしい。

【A1】

FY2035 時点で、再エネ 50%、省エネ 25%、技術革新 25%の寄与度を想定しています。

【Q2】

軸受の生産においては熱処理工程の CO₂ 排出量削減が大きな課題とみている。熱処理の電炉化が進み、欧州のように再生可能エネルギー化が進めば、カーボンニュートラルを達成できるということか。

【A2】

熱処理工程は重要な課題です。熱源を電力に切替え、電源の再エネ化が進めばカーボンニュートラルにつながります。電力による熱処理では対応できない軸受もあり、他の燃焼型の再エネを使う別の技術でのトライアルを進めます。

続いて、生産設備の稼働、空調等のそれぞれが CO₂ 排出量の約 1/3 ずつを占めているというイメージですので、これらへの対策も重要になります。

【Q3】

CO₂ 排出量削減への取り組みがコスト、業績にどう効いてくるのか。

【A3】

省エネはコストダウンにつながりますが、再エネの調達費用、技術開発、設備投資などで上昇するコストをオフセットするのは難しいと考えています。我々のカーボンニュートラルの価値をお客様や社会に見てもらい、差別化や付加価値として売価に認めてもらえるようお客様と交渉していきたいと考えています。

◆「つかう」の取り組みについて(お客様の CO₂ 排出量削減に貢献)

【Q4】

軸受の低トルク化による高効率化など、軸受の環境貢献価値は新たな付加価値になると思うが、その部分のブランド化やマーケティングについてどう考えているか。

【A4】

カーボンニュートラル推進部がブランド戦略を事業部と連携して進めている。NSK の差別化技術を活かした、地球にやさしいグリーンなベアリングの価値を買って頂きたいと考えます。

◆Scope3 への取り組みについて

【Q5】

他の機械メーカーなどでは SBT(Science Based Targets)認定に取り組んでいるところもあるが、NSK はどのように考えているのか？

【A5】

SBT 認定を取得するには Scope3(上流)の考えも含めたカーボンニュートラルに向けたマイルストーンが必要です。カーボンニュートラル推進部で検討を進めていますが、鉄鋼メーカーを含めたサプライヤーの活動方針が明確になった段階で初めて開示できると考えており、この中期経営計画の中で、ディスカッションを進めていきます。

【Q6】

鋼材メーカーやサプライヤーといった調達サイドにおけるカーボンニュートラルへの取り組み状況について教えてほしい。

【A6】

サプライヤーさんとの協業は重要です。サプライヤーの皆さんとカーボンニュートラルへの取り組みの重要性を共有できており、取り組み内容の情報交換などを開始しています。また、使用する材料の歩留まり向上など、NSK が Scope3 の CO₂ 排出量削減に自主的に取り組める活動は着実に進めています。さらにグリーンスチールの開発などに関して、当社が貢献できる領域があれば積極的に関わっていきます。

Scope3 への取り組みは大事です。鋼材などのサプライヤーさんとのパートナーシップの構築は重要な課題として取り組んでいきます。

◆NSK の成長機会について

【Q7】

カーボンニュートラルの流れはオポチュニティでもあると思うが、競争環境に変化はあるか。例えば競合に対して NSK が有利になっているなどあれば教えてほしい。

【A7】

お客様からのカーボンニュートラルに関するアンケートが増えるなど、NSK のカーボンニュートラルの取り組みへの目線は厳しくなっている認識です。他社との競争領域では低トルクや製品重量など「つかう」領域での NSK の差別化技術を活かします。お客様の製品への要求も厳しくなってきていますので、NSK の技術力が発揮できると考えます。

■その他

【Q8】

P17 のトラクシヨンドライブ減速機の受注状況、事業化状況は、コロナ禍で EV 化が加速する中でどうなっているのか。

【A8】

色々なお客様からトラクシヨンドライブ減速機の性能評価についてお話をいただいています。お客様は、トラクシヨンドライブを活用しどのような価値を出せるか見極めようとしています。まだ量産にはつながっていませんが、トラクシヨンドライブの PR 先は産業機械にも広がっており、必ず量産化に繋がると確信しています。

EV 化が加速する中でモーターを高速回転化して小型化・省資源化を狙う傾向にあります。将来的にモーターの最高回転数が 3 万回転に近づくと予想され、トラクシヨンドライブのもつ低騒音、小型化などの機能的なメリットを活かせると考えています。

【Q9】

生産の超安定化について、現状における具体的な課題は何か。

【A9】

生産の超安定化の取り組みもカーボンニュートラルにつながっています。不良品や品質トラブル、設備トラブルなどが発生しないということは、さらに効率的な生産が可能になるという事ですので省エネになります。作業する人たちが安全安心に生産でき、エラーやミスが起きにくいモノづくりをこの中期で目指していきます。

以上